

# 近代黎明期・道德教育論をめぐる相克と両義性

——中村正直の教育論を中心に——

酒 井 玲 子

# 近代黎明期・道德教育論をめぐる相克と両義性

——中村正直の教育論を中心に——

酒井玲子

## 目次

- 第1章 近代教育の黎明期
  - 国学と欧米思想 —
  - 第1節 維新期の思想
  - 第2節 国策としての欧米教育
  - 第3節 修身・道德教育論
- 第2章 中村正直とその教育思想
  - 第1節 思想経歴と教育活動
  - 第2節 教育勅語案の作成
  - 第3節 女子教育、幼稚園教育への貢献

## はじめに

欧化政策に奔走した近代国家の黎明期を経て明治10年代にはもう伝統的な儒学の復活や修身教育の強化策に乗り出していく。こうした短期間での教育思想やその施策の変容は如何なる理由によるのだろうか。

そこには遡って幕末から近代国家の幕開けの時点で教育思想に内包されていた二面性があり、「教学聖旨」は後の復古的教育に道を開き、「教育勅語」はその集大成となった。

そうした視点から本稿では、儒教道德、藩や国家の修身教育を温存しつつ、欧化政策を進めていく過程において活躍した人物を取り上げ、主として彼らに体现されている道德教育の思想を探る。

ここで取り上げた西村茂樹、中村正直、田中不二麿らは、幕末から維新にかけて儒学、国学、仏教学などを修めた。それぞれ異なった立脚点ではあるが、西欧の思想や道德の修

得に努めた点では彼らは共通している。

彼らが内に異文化を共存させ、その両義性を如何ように主張したのか、あるいは両方の狭間での葛藤や相克の有様を探りたい。

その際、修身・道德教育を中心にしながら、女子教育や幼児教育をも考察の対象としたい。

## 第1章 近代教育の黎明期 — 国学と欧米思想 —

### 第1節 維新期の思想

#### (1) 国学・儒学・漢学の動向

明治政府は1871(明治4)年に廃藩置県と文部省を設置するのだが、それに先立って「学制」の草案作成のために、全国の藩校や学習塾などの教育実態の調査を行った。その結果、学校制度に関する国学、儒学、漢学を主とする書物が上梓された。

維新前には藩校や郷学、教導所、啓蒙所、寺子屋にいたるまで、士族、庶民のためのさまざまな教育施設が500校近くも設立されていたという<sup>1)</sup>。

静岡の沼津兵学校付属小学校は1868(明治元)年12月に、京都では「学制」の発布前までに64校、名古屋でも1871(明治4)年までに小学校4校などが開始されていた。

かくして、1872(明治5)年に「学制」が発布されるが、それにあたって新政府は、少なからずこれら幕末から明治初年に各地で開設されていた学校や教育施設の建物、仕組み、

教授内容を取り込んだのである。維新直後から「学制」発布までに皇国史観に立つ国学者や漢学者によって学校の設立方針が提示されている。

それらの国学者には矢野玄道、長谷川昭道などがおり、漢学者の加藤有隣は「大小学校建議」を提出するなど、積極的に学校政策を建議・提案した<sup>(2)</sup>。

天皇の権威の下に強力な中央集権国家を作るために政府は「学校掛」を設置した。

神祇・内国事務局を設置し、平田派国学者矢野玄道、玉松操、平田鉄胤に1886(明治元)年『今般学校御取立ニ付而者制度規則等取調之儀被仰付候間銘々申談急速可取計候事』(取調申付ク)、つまり、学校制度の規則を立案するよう下命したのである。

これによって作成されたのが最初の公的な学校制度案=学舎制である<sup>(3)</sup>。

そこでは、儒教と神道主義による祭政一致の復古的な天皇制国家設立のための学校案が作成されたのである。

国学者の中でも、六人部是香著『道之一言』には、皇国の卓越性、皇国の世界征服が掲げられ、学校は「神国としての国体」の確立を目標に、古道の教化を中心とした学館の設立を説いた。

彼の著『古伝抄』によれば、氏神である産須那神は日常生活における氏子の道徳実践を重視する。そのため、不忠、不義、不慈、不孝の排除によって、秩序の維持が唱導された。それは「職掌家産」から「国家の御為」へと勤める人間への教化であった。

また、矢野玄道の学校構想である「本学費」によれば、天皇の神格性への尊崇の念を中心として、一般人は 治者の神への奉仕、天皇による仁政、天皇の御心と人心の一体化へと強化されなければならないとされた。

矢野の構想する学校はそのための修練所的なものになっている<sup>(4)</sup>。

新政府が私的政権ではなく朝廷を中心にし

た公的な政権であることを印象付けるためにも「神道的な価値体系の下で教育を構想したことは、神道的な価値体系が旧幕藩体制を思想的に支えていた儒教的な価値体系を克服し、その面から旧体制を否定し様という機能を持っていた」という<sup>(5)</sup>。

一方、同じ国学者の長谷川昭道は学校についての「健言書」を岩倉具視に宛てていた。

彼によれば、儒教批判のためとして洋学の導入は愛国心(パトリシズム)と自然科学の振興から一定評価している。

彼によれば、儒教を根底とした既成の学問の批判から出発して、新しい時代にふさわしい学校が構想されなければならない。それは諸学問を統合した皇学で、政府の太政官直属の機関とすべき、と説いている。

その主張は、国学・儒学・洋学の世界観を統合するという発想であり、日本特有のものから普遍的なものを志向していた。

国別から科目別の学科編成という新構想もあった。だが、その新たな提案にも関わらず、新風には追いつけず、「人民ハ祖宗ノ人民ニシテ、皇家ノ僕妄ナリ、決シテ自主自立ノ民ニ非ザル也」<sup>(6)</sup>という後退した立場を踏襲したのである。

## (2) 儒学の道徳

翻って、1869(明治2)年の「諸府県施政順序」の中には、「小学校ヲ設ル事」とあり、その内容として、道徳教育の重視、「国体時勢ヲ弁ヘ忠孝ノ道ヲ知ルヘキ様教諭シ風俗ヲ敦クスルヲ要ス」との方向性が示されているのは見逃せない。

すなわち、新政府の教育に対する眼目は、欧化主義をとりつつも、国体や忠孝の道を軽視していたわけではなく、旧思想の継承は、近代学校制度の開始後も並行して重視されていたことがわかる。

それは、国民教化のために神道教義を基本にした「三条の教憲」に、「敬神愛国」「天理人道」「皇上ヲ奉戴」「朝旨ヲ遵守」が謳われ

ていることを見てもわかるのである<sup>7)</sup>。

横井小楠は儒学者であったが、国際主義に立って開国論を唱えた人物である。「天地宇宙内ノ道理」を説き、キリスト教に対置したのが「三代の治道」である。それは「国家を超越する普遍性の思想原理」<sup>8)</sup>で、戦争の追放と国際平和を求めていた。そのため、この時期にアジア進出を目論む帝国主義政策を批判しているのは注目される。

一方、西洋学は事業の学で心徳の学ではないとも説いている。

1879(明治12)年に制定の(自由)教育令は、学制を廃し、その複雑さを簡素化して学校政策を地方行政に委ねた。

その結果、学校後退や混乱も沸き起こったので、その翌年には統制を強めた改正教育令が打ち出されたのである。

その背景には自由民権運動への牽制もあり、これを契機に影を潜めていた儒学的な徳育の強調に転換し始めたのである。その表れが前年の「教学聖旨」である。

そこでは、「教学ノ要、仁義忠孝ヲ明ラカニシテ」から始まり、「我祖訓国典ノ大旨」を一般に教えるようにと指示している。それは、欧化主義の風靡が品行や風俗を損っていることへの警告であった。

そして「道徳ノ学ハ孔子ヲ主トシテ、人々誠実品行」を尊ぶこと、この教学が天下に広がれば、宇宙内に恥じることなし、と謳われているのである。

この聖旨の後半の「小学条目二件」には小学校に忠臣、義子、孝子、節婦の画などを掲げ、幼少から忠孝を脳裏に刻むことの大事さを論している。

## 第2節 国策としての欧米教育

### (1) 学制にみる欧米教育

維新当初に戻るが、欧米の教育水準に追いつくことが近代化策の喫緊の課題であったために政府は、火急に欧米の学校制度の視察や

欧米関係の学者に研究にあたらせたのであった。

その具体化策として、欧米の学校や教育制度を西周等の学者に検討させ、これを基に、『大学規則』と『小中学規則』(1870, 明治3)を出版している。また、モルレーやフルベッキなどの文部省雇外国人の意見を参考にした。

他方、同1870(明治3)年から約1年半、岩倉具視等の使節団を学校制度や運営の実態査察を目的として欧米各国に派遣した。翌年、文部大輔である江藤新平はフランス法学者の箕作麟祥らと協議し、教育の方針を立てている。

1871(明治4)年7月18日に文部省が新設され、文部卿(文部大臣)に大木喬任を任命し、12月23日には「文部省布」の公布。学校は「各其才能技芸ヲ生長」のために存在し、産業文明のために国民を教化するところ(東京の学校、小学校7、洋学校1、男女の就学年齢に差)という方針が固まった<sup>9)</sup>。

その間のさまざまな施策をへて、1872(明治5)年8月2日、全国に統一的な学校制度、すなわち「学制」が太政官布告第214号として発せられたのである。

この間、欧米の教育事情について多数の書物が出版されたが、学制や初期の教科書に影響を与えた書物には次のようなものがある。

福澤諭吉の『西洋事情』、内田正雄訳『和蘭学制』、小幡甚三郎訳『西洋学校軌範』、村田文夫『西洋見聞録』など。

欧米の教育に精通した学者を「学制取調掛」に任じたことからみても、政府が欧米諸国を学校と教育制度の先進国と捉えていたことがうかがえる。

政府はフランス、オランダ、アメリカ、ドイツの学校教育を検討し、とりわけフランス法制学者の箕作麟祥を中軸とした「学制取調掛」(学制の起草委員)によってフランスの全国統一的な学校制度を主として導入したのである<sup>10)</sup>。

当時、教科に修身を設置しているのはフランスのみであったというのがこの理由とされている。

学制発布の経過は「学制草案の伺文」を基にした「被仰出書」によって発布の趣旨が説明され、立身が治産・昌業に繋がるという文脈になっている。例えば、この学制解釈について山梨では、「国家の富康文明人の才芸」「実用に疎くてはだめ」「従来弊學すこぶる固陋」「学弊を洗除」「人民のための学校制度」というような斬新な文字が並んでいた。

「文部省報告課編纂書籍取扱心得」には民間からの教科書出版を広く認め、奨励され、教科書の統制や全国画一化はしなかったという<sup>12)</sup>。

このように、学制発布当時は政府官僚や民間人がこぞって、先進の欧米教育の導入こそが近代国家の理想、という西欧化熱が蔓延していた。その中で道德の教科書の編纂も盛んに行われたわけである。

政府は米人スコットを師範学校教師に招聘して教科書や教材をアメリカに発注し、教授法を教えさせた。教科書の統制は無く、古今東西の道德書、それに藩校や寺子屋、私塾などで使用されていた書物を修身口授という方法で談話的に伝えられたのである。

『近代教科書の成立』よれば、修身教科書の主なるものは常磐貞尚著『民家童蒙解』（享保20）の他、往来物や四書五経も使用されていた。そのなかには儒教の經典などもあったという<sup>13)</sup>。だが、その多くは下記にみるような翻訳本であった。

- 中村正直訳『西国立志編』（明治3）
- 箕作麟祥訳『泰西勸善訓蒙』（明治4）
- 神田孟格訳『性法略』（明治4）
- 福澤諭吉訳『童蒙教草』（明治5）
- 阿部泰蔵訳『修身論』（明治5）
- 渡辺温訳『通俗 伊蘇普物語』（明治6）
- 永峯秀樹訳『智氏家訓』（明治8）
- 和田順吉訳『訓蒙 勸懲雑話』（明治9）

## (2) 明六社の道德教育論

その教育政策立案にあたって、上記翻訳者のような民間の学者の果たした役割が大きい。

さて、明六社への参加は、主導したのが森有礼で初代社長となり、その他に、福澤諭吉、加藤弘之、中村正直、西周、西村茂樹、津田真道、箕作秋坪、杉亨二、箕作麟祥等であった<sup>14)</sup>。

旧幕府官僚、学制の制定に関わった人物も多かった。なかでも蘭、英、米の文化に精通していた福澤のように、終生、民間教育に携わった者がいた反面、ドイツの学問に秀でていた加藤などは主に官の業務に携わった。福澤諭吉が独立自尊、冠爵よりも実利、迷信に惑わされず、誠心誠意一身に忠実であれと説く等、明六社において優れた論陣を張ったのである。

かくして明六社中には多少の相違があったが、社誌『明六雑誌』（3200部）をみると概ね共通点はその思想的なスタンスで、自由と民権の思想、男女同権、宗教の自由論などの他に道德教育論もあった<sup>15)</sup>。

例えば、箕作麟祥「人民の自由と土地の気候と互に相関するの論」、中村正直「人民の性質を改造する説」、福澤諭吉「男女同数論」、津田真道「夫婦有別論」、「廢娼論」、「夫婦同権弁」、阪谷素「妾説の疑」、森有礼「妻妾論」、加藤弘之「夫婦同権の流弊論」などである。

明六社に属する思想家の教科書や道德教育の教材としては『民家童蒙解』、『童蒙教草』、『学問のスズメ』、『西洋事情』、『啓蒙手習の文』等があり、広く学校で用いられた。

それらの『明六雑誌』掲載論説のうち、中村正直の7回に渡る翻訳書「西学一斑」やその他の論説からは、彼の思想を窺い知ることができるし、これらは初期の道德教育に多大な影響を与えたものであった。

### 第3節 修身・道徳教育論

#### (1) 西村茂樹の道徳論

さて、一方、明六社の西村茂樹が教科書出版や道徳教育に果たした役割は見逃せない。

西村は維新前には儒学を修めた思想家であったが、明六社を福澤諭吉などとともに結成した当時は、啓蒙的な知識人として国民道徳運動に身を投じていた<sup>66</sup>。

まずは、『明六雑誌』によると西村の全論文（岩波文庫3巻本）は次のようである。

「改文字」、「陳言一則」、「政体三種説」、「自由交易論」、「修身治国非二途論」、「賊説」、「西語十二解」、「自主自由解」、「政府与人民異利害論」、「転換説」

上記のなかでも、「修身治国非二途論」（明治8）は彼の徳育教育論である。

「これより世の功利に走るの徒、孔孟の道をもって迂闊なりとし、修身誠意の学を務めず、その身衆人の上において、その品行衆人の下にある者あり。あに慨嘆すべき至にあらずや<sup>67</sup>」

この論説では動物と異なる人間の特徴は「道理分」で、それは良心の力で「天理」と物欲を区別するところにある。人の身を修め、家を齋得、国を治め、天下を平にするのは、ともに道理のことなのである。かくの如く嘆きつつ西村は、西欧諸国の学者賢人の節を援用して修身と治国の分離はないと述べている。

彼はエマーソンの「修身学は正しき政治の根源なり」、ベンタムの「政治上にて善となすところことは修身上にて不善となすことなしと」、

トーマス・ブラウンの「敵に勝つをもって勇となすこと無かれ、己が情欲に克ち得てはじめて真の勇者と称すべし」などの言葉を挙げ、とくに高官、貴族に対して修身こそが治国の本であること、「天地の真理」とは事実、現実の中にある真理であり、国民の「品位」として、勤勉、節儉、剛毅、忍耐、信義、進

取の気性を挙げている。個々人の品位が愛国心、富国強兵と万世一統の皇室を奉戴する精神に連なっていくと説く。

元々西村は儒教主義者であったことはすでに述べたが、彼は儒教には国威拡張のための「進取の気性」や西洋人のいう「パトリオチズム」、「愛国の義」が少ないと指摘し、これ無くして愛国の行を顕したものはいないと、「日本道徳論」において儒教批判の演説を展開している。

#### (2) 日本道徳論の展開

その一方で、「唯世人は西洋現今の有様を真似んと欲し、余は西人が今日の文明をいたしたる精神と順序とも真似んと欲するなり<sup>68</sup>」、と当世人に西欧文化の形式的な模倣を戒めている。そこには異文化を認めつつも、同時にその受容の姿勢に批判を加え西村の姿勢が表されているのである。

西村は1873（明治6）年、文部省の学事巡視官として地方を視察するが、各地で学校が国民から遊離し、とりわけ修身、道徳教育の軽視のありさまを目の当たりにする。

彼は『明六雑誌』に寄稿の当時は、政府による学校教育への干渉を否定していたが、この頃から道徳教育の必要性を強力に訴えるようになる。西村は極端な欧化主義に対抗する保守的団体「弘道会」を創立した。その後、雑誌『修身学社叢説』を発行し、忠孝仁義の道徳を説く。1886（明治19）年の演説は保守的な「日本道徳論」である<sup>69</sup>。

やがて、国家もその方向に傾き、1879（明治12）年に元田永孚が教育の大方針の『教学大旨』を著し、国民道徳を復古的な儒教に基をおいた。その際、修身の教科書は西村の編纂に委ねられ、『小学修身訓』上下2巻（明治13）、『日本道徳論』（明治20）などは、啓蒙思想を含みながらも、より国家主義的な道徳教育論を体系化したものであった。

総じて西村の道徳思想のスタンスは伝統的なものと開明的なものとの共存で、西洋の実

利的な知識や思想をも受容しつつ、それを日本化する過程で国家道徳に回帰し、明治の10年代以降は復古的姿勢が強く打ち出されているのである。

## 第2章 中村正直とその教育思想

### 第1節 思想経歴と教育活動

#### (1) その人物像

広く学校教科書として使用された修身書『西国立志編』(明治3)の訳者で、幕末から明治にかけて、同人社や明六社で活躍した人物が中村正直(せいちよく、敬字)である。

彼は当代随一の和洋思想家であり、儒学者、漢学者にして西欧思想の両方をいわば「異文化共存」<sup>20)</sup>させた人物の典型である。

中村の儒学の学風だが、佐藤一斎を師とし、系譜は朱子学にある。高橋昌郎の著『中村敬字』には「忠孝ヲ忘レサル事」から始まる「誓司」なる道徳律をもって自らに課したことを紹介している<sup>21)</sup>。

中村の人物に関する研究書は少なくないが、古くは、石井民司著の『自助的人物典型 中村正直伝』がある。この書で興味深い中村正直像の紹介文である。ジャパントイムズ社宛の寄稿文 Yone Noguchi 名で“A ture Funder of Empire”(明治40年3月9日付掲載)という一文の添付である<sup>22)</sup>。

そこには中村の言葉として「盗人は自分以外何も盗めない」、「欺く人間は自分を欺いているのである」、「私を非難する人がいると聞くと私は勝利のサインと感じる」、「私たちの人生は神への道を学ぶことから始めるべきだ」等の箴言を紹介しているが、これらは聖書の文言に通じている。

そこには西洋文明導入の旗印の下、日本のモラルの改革者でもあり、盲・聾啞の学校設立の先駆者ともなっていると記されている<sup>23)</sup>。

哲学者の井上哲次郎は、中村を文明開化主義の理想主義者、精神主義と道徳の人と評す。

その維新前からの社会活動は急進的ではなく、自由な学風で、「何とも言へない一種卓越し足る人格者として学生生徒に非常な薫陶上の効果を現す者」、「人格的教育家」<sup>24)</sup>と評している。

こうした評価は薫陶を受けた者たちの回顧録からも窺える。

三宅雄次郎は、中村の漢学の授業は、細部にわたる字義の講釈ではなく、漢詩の時代的背景や節をつけての講読などで真の意義を理解させようとした、と次のようにいう。

「精神の勝れずとも物質文明の出来得るかを尋ね、根源たるべき精神を捉へやうと骨を折られました。」<sup>25)</sup>

#### (2) 敬天の教育論

攘夷論者は開国による植民地化や異教・キリスト教蔓延に対する不安があるが、中村はこうした説への反駁を展開している。一方において、西洋の技術の採用など、振学政策を鼓舞し、洋学の禁を解き、儒者も西洋の文化や言語を学ぶべきと説いた。

中村は1866年から68年(明治元)にかけて留学生取締り(引率者)に任ぜられ、英国、フランスに渡航した。それらの体験から、西洋の学問には精神と自然の二系統があること、東洋には道徳があり、西洋には芸術的思想があり、これらは、啓蒙思想、実学思想へと発展したことなどを説いている。

なかでも英国での異文化体験は、儒教とキリスト教の一致、儒教の天はキリスト教の神と一致するという思想的境地に到達する契機となった。

その後の『擬泰西人上書』(明治4)では、西洋文化の進歩にはキリスト教が淵源にあり、日本の近代化にはキリスト教の解禁が必要であることを訴えている。それが高じて、同年、天皇宛てのキリスト教入信への勧誘を上申したりした。

その内容は、日本は西洋文明の根本思想を受容しておらず、西欧と互角に肩を並べるには、まず天皇自らが基督教の洗礼を受けるべき、という大胆な内容であったという。<sup>26)</sup>

そこには、西洋社会は基督教の教法（宗教）を持って精神、治化の源となっており、勤勉、忍耐の勢力はその教法の信、望、愛が根本にあるという確信があったからであろう。

また、仏教も基督教も「流儀ハ異ナレドモ、ソノ療治ヲ施スノ心ハ一ナリ。何レモ衆生ノ罪惡ヲ滅ボスノ道具ナリ」<sup>27)</sup>と説く。その意味では、儒教も含めて三教の一致というのが究極的な中村の思想のスタンスであった。これらの中村の境地については高橋が次のように表現している。

儒教の「上帝」や「天」を、基督教の神であると考えようとした。しかし、キリストについては全く言及していない。また、禍福の権については、儒教において本来論ぜられたのであるとして次のようにいう。「(中略)敬字の努力にもかかわらず『神』の観念は、儒教の観念によっては説明されなかつたし『罪・救い』も説明できていないというのが事実であろう。」<sup>28)</sup>

中村がその文物から先進国に関心を抱くと同時に、精神活動としても深く基督教へ傾注していく。若き日から、「道徳の実践者」であり、「理想主義者」、「精神主義者」であった彼にとってはそのスタンスは哲学的論理を重んじる必然の到達点であったと考えられる。

### (3) 西洋道徳の導入

中村をして教育界、いや世間一般にその名を知らしめたのは、何と言ってもスマイルズ著『西国立志編』である。

これは英国人による“Self-Help”(1859)の翻訳で、1870(明治3)年より数巻ずつ刊行され、翌年には全13巻が刊行されている。

そこには近代の市民社会を生き抜く自主自立の精神が説かれ、立身出世の実利主義的な考え方があるにせよ、「人民各自勉強ノ力ト正直ノ行ト綜合セルモノナリ」<sup>29)</sup>という道徳が重視されていた。重要なのは中村が、実利と精神の両方を重視していたことにある。

当時わが国の学校では道徳教科書が自由であった時勢にあつて、中村によるその翻訳書は道徳の主要な文献とされ、数十万部も刊行されたという<sup>30)</sup>。

中村の一貫した主張は、日本の近代化には物質文明と制度の変革(民選議員の選出)が必要であるが、根本的には精神構造の変革であるというものであった。

『明六雑誌』の「人民ノ性質ヲ改造スル説」<sup>31)</sup>では、人民の性質の改造は芸術と宗教によるものと述べている。

そこでは、民選議員は喜ばしいことではあるが、従来の奴隷根性を持った人民であれば政体はあまりかわらない。まず人民の性質を改造する必要がある。芸術と教法の二つは車の両輪、鳥の両翼であるから両方で民生を福祉に導くことにある。西国の教法(宗教)を嫌い憎むにあたらぬ。

欧米の人民と同じような高度な教法が人民の性質の改造、「人心一新するの道」<sup>32)</sup>であると説く。

なお、ここでいう教法、すなわち基督教は我国では1873(明治6)年に到るまで禁止されていたという事情がある。森有礼は在米中に「日本における宗教の自由」という英語論文の発表などを発表し、信教の自由を唱え、神道政治を否定しているが、それは明六社同人に共通した考え方であった。

『明六雑誌』には中村が「西学一斑」を7回にわたって連載した<sup>33)</sup>。

その主張の要点では、科学の発展と宗教的自由論の一致ということであろう。

1) 印刷術で新教が起り、人々法教を読む  
- 自由の権 - 実験の学 - 四海往來人が智開



- ける
- 2) コペルニクスによる自然科学の発展－キリスト教への影響－メランヒトンの良心説
  - 3) 国民の智識増大が民主政治を進展させる契機
  - 4) 宗教的自由, 市民的な自由政治的斬新主義
  - 5) ベーコンの影響によって科学と造物主の精神とが一致して人心は善に向い, 悪に遠ざかる
  - 6) 学問と啓蒙の成果がベーコンの誤謬とヒュームの役割などが明らかになる
  - 7) ホッブスの政治論

## 第2節 教育勅語案の作成

### (1) 教育勅語案作成の動向

中村の教育思想が如実に表されたものとして、(略称)教育勅語(「教育ニ関スル勅語」)の草案(「徳育大意」)がある。

近代黎明期の道德教育の様相はすでに見てきたが、時代精神を担った中村正直は、教育勅語の草案作成という重責を負ったのである。

これを海後宗臣による『教育勅語成立史研究』から見てみたい<sup>64)</sup>。

実際、教育勅語は明治期のスタートから今次世界大戦に至るまでの国民精神を統一した集大成の道德律であったわけである。

海後によれば、この勅語の作成要望は、明治21年頃からの動きであったという。その2年後の2月、東京で開催された地方長官会議で徳育問題が焦眉の課題とされたことに端を発するという。この会議でのちの教育勅語への道を開く「徳育ノ涵養ノ偽ニ付建議」が出されたのであった<sup>65)</sup>。

その背景には、近代化策が日本人を卑下し、欧米人を高くみるような傾向があり、その風潮を改め、日本人の徳育の根本となるものが必要である、という認識であった。

その後の内閣での論議では、儒教による「人倫五常」の精神を基本とする案に固まっ

ていくのである。また、それは1872(明治5)年の「軍人勅諭」や同年の「幼学綱要」の中の徳育を基本とした勅諭の形も参考にされた。そして、この徳育の方針は次第に勅諭、すなわち天皇からの下命として絶対的に「服膺」すべきものに固まっていくのである。

### (2) 中村の教育勅語案

要請されて作成した中村の草案の骨子は修正案を含めつつ、大体以下のような内容であった。

- 1) 忠孝が人倫の基本, 万世一系の皇室に忠実
- 2) 天心は福祉をうる道
- 3) 敬天敬神は人間の本性にして, これに従うことで, 忠孝, 仁義, 信義となる
- 4) 人間の心を天地神明がみている
- 5) 心中に神が宿るので清浄純正にしておく
- 6) 勧善懲悪によって禍を避け, 福を求める
- 7) 皇国臣民は忠君愛国, 品行完全, 外国人をして畏敬させる
- 8) 独立の良民となって, 富強の国家を作る  
民に艱難辛苦あり, 一身, 一家, 社会の福祉への任
- 9) 国の強弱は人民の品行による  
忠信, 礼儀, 勤儉, 剛勇, 忍耐の気風によって, 強者の餌食にならない<sup>66)</sup>

### (3) 廃案とその背景

上記の中村案は「敬天敬神」の言葉のように、儒教の天とキリスト教の神を合わせたのがその骨子である。

これはすでに見たように、かねてよりその教えの両義性の延長上にある。天や神を仰ぎ、忠信、仁愛に尽くすことが人倫と教育の根源であるとする思想である。

だが、こうした宗教性を帯びた「折衷」案では井上毅文相の考えとは相容れなかった。文言や文体の形式を含めて、修正8回に及んだにもかかわらず、中村の教育勅語案は廃案になってしまった。

中村の教育勅語案は他の儒学者などの案も含めて取り込まれたものがあるが、最終的には井上が作成することとなった。

海後はその理由を国民に混乱を引き起こさないような「皇国臣民たるものの覚悟」が記される必要があった、と述べている<sup>87)</sup>。

また、先の藤原喜代蔵は次のように井上の勅語について評している。

「兎もあれ、彼が文部大臣になって、国家主義を奨励するに及んでは、教育界の風潮は蕩々としてこれに傾倒し、国語漢文は諸学校に於ける重要教科となり、勅語は教育上の最高経典として奉戴せられ、忠孝主義の道徳は、学校教育の中心理想たるに至った。」<sup>88)</sup>

### 第3節 女子教育、幼稚園教育への貢献

#### (1) 女子教育論

その中村が女子教育に手を染めたのは静岡時代の私塾といわれているが、文献上では1873（明治6）年、東京江戸川町17番地に「同人社」の開設に始まる。最初は分校に女子を入学させていたが、その後それを本校に合併し、同人社女学校として開校している。

英語、漢学、裁縫、習字、数学などを課業とし、歴史や政体まで教えていた。これら科目の教科書には『男女同権論』や『代議政体論』などがあり、女子の政治的啓蒙を目指していたという<sup>89)</sup>。

中村の女子教育への熱意は特に英国体験による家庭や婦人からの影響が強い。

1868（明治元）年の「敬天愛人説」では、「男女同権」と「同学」を主張し、「徳福合一」、道徳なくして天下を統括することは無い、と述べている。

そうした女子教育論のなかでも『明六雑誌』に掲載の「善良なる母を造る説」<sup>90)</sup>は、彼の女子教育論（母親教育）の代表であろう。

その内容では、人民の心の一新と高度化のために為すべきことは修身・敬神の教育と技

芸・学術の教育の二つにあるという。後者は5、6歳になっても良いが、前者は、母の胎内の時から始め、そして誕生から耳目に慣れ親しむ生育環境が絶対的な手本になる。

知識が開ける以前に道徳や天道の教えが染み込むことは身体に滋養を得て強健になる、との考えである。

「人民をして善き情態、風俗に变じ開明の域に進ましめんためには、善き母を得ざるべからず。絶好の母を得れば絶好の子を得べく、後来吾輩の雲（じょう）に到らば日本は絶好の国となるべく、修身、敬心の教も受くる人民となるべく、技芸、学術の教も受くる人民となるべく、智識上進、心術善良、品行高尚なる人民となるべし」<sup>91)</sup>

善き母を造ろうとするなら女子を教えるということになる。健康な道理、旺盛な精善徳空気を吸うこと、天道の日光の沐浴、もって智識の門とする。男女同権の弊害を言うものは教育の無い婦人は亭主を軽蔑することにある。諸徳となる基本はすでに揺籃に戯れる間に育つ。男女の教養は同等であるべしで、「天賦の才知をもっとも多き人は真実の愛情ももっと深き人なり」<sup>92)</sup>と述べている。

#### (2) 東京女子師範学校の開設

先述のように、岩倉具視等の使節団が欧米を訪問したのだが、その理事官に田中不二磨がいた。彼は1874（明治7）年1月、東京女子師範学校の設立の伺い書を太政大臣に提出した。その文書には以下のような文言があった。

「女子の性質婉静音に能く其教科を講習するを得るのみならず、向來幼稚を撫養するの任あればなり。」<sup>93)</sup>

ここに見るように、田中は、欧米の実態をつぶさに観察して詳細に記録し、女子教育と

幼児教育の関わりを唱え、その重要性を説いている。

文部官僚の彼は空理空論を避け、音楽や体育の振興を諮るとともに複雑な学制を廃し、簡素な(自由)「教育令」を制定に踏み切ったのも彼である。

そうした田中であつたからこそ1875(明治8)年の東京女子師範学校開設にあたり、女子教育に造詣の深い中村正直を摂理(校長)に任じたのである。そうして翌年、中村の「建議」等により、付属幼稚園が開設されたわけである。

### (3) 幼稚小学から幼稚園の設立へ

学制の21章には「幼稚小学」の規定があるが、尋常小学のような「教則」もなく、これは実際の設置を見ないまま立ち消えになってしまった。

この事情に鑑みて、田中不二麿が女子教育と幼児教育の振興のために、1875(明治8)年、東京に女子師範学校を設立し、ここに小学校と幼稚園を附設するのである。

さて、その東京女子師範学校開設の翌年、1875(明治8)年7月に田中は「幼稚園開設之儀伺」を太政大臣宛に提出したのだが、一旦は差し戻され、翌年1月に認可された。

その成功の裏には行政官の田中が小泉恒太郎や中村正直など、著名な学者を女子師範摂理(校長)に据えたこと、欧米の幼児教育施設やドイツのキンダーガルテンの積極的な吸収策が功を奏したといえる。

### (4) 関信三との関り

その幼稚園の監事(園長)は関信三であつた。彼が女子師範付属幼稚園の監事(園長)に着任するまでの、中村正直との接点などを研究した国吉栄の著、『関信三と近代日本の黎明』(2005, 新読書社)には、その間の事情が詳細に記されている。両者の実際の出会いはもう少し以前で、横浜での宣教師による英語塾、そして日本基督公会などであつた<sup>44)</sup>。

それらは、湯川嘉津美の前掲書『日本幼稚

園成立史の研究』(2001, 風間書房)にも触れられているので、ここでは省略する。

中村の幼児教育に関する翻訳書にドウアイ著の“The Kindergarten”(1872)がある。これは、最初、中村正直の論文として『教育雑誌』第4号に「トゥアイ氏幼稚園論ノ概旨」(1876, 明治9)として掲載されたものである<sup>45)</sup>。

それは名の示す通り概説書であつたが、関信三がより完全な翻訳本『幼稚園記』(全3巻)と題して刊行した。

中村正直と関とのつながりは東京女子師範学校摂理(校長)と付属幼稚園監事(園長)の関係である。ともに女子教育と幼児教育の重要性を認識し、この東京最初の幼稚園で重責を担つたということが重要なのである。

最後に中村の養女リクはのちに彰栄幼稚園の創設者となつたことを付記しておきたい<sup>46)</sup>。

## おわりに

近代の黎明期、漢学、国学者たちが出会つた欧米諸国の思想の様相が如何なるものであつたか。その複雑で興味深い事柄は本稿で取り上げた中村正直たちの著書や翻訳、論文によって垣間見ることが出来る。

藤原喜代蔵は今次大戦最中の1943(昭和18)年、『明治・大正・昭和 교육思想學說人物史』を著した。その出版の時代を色濃く映すこの著書は、あの近代黎明期の欧化主義勃興の理由とそこで活躍した人物を評価している。

彼はその著で福澤と中村を比べている。福澤は斬新奇抜で縦横無尽に天下を論じ、実践活動に邁進した「覇者」だという。それに対して中村は「王者」だと表現している。泰然自若、言行一致で、同人社出身の后者は、真の和平を保つていて、慶応義塾生とは異なるというのである。

異文化共存という観点から考えてもこの時期に多数の秀でた学者や官僚が出たが、その

中でも中村は「一個の高潔なる善人」<sup>67</sup>であったところを高く評価しているのである。

本稿では、その国家主義が幕末から内包していた点を明らかにしたつもりである。

今後は中村の教育勅語草案とその廃案の背景を詳細に分析して見ることで、明治の黎明期から国家主義の時代に進む様相をさらに探っていききたい。

最後になるが、中村の晩年のエピソードをあげておきたい。

ある時、友人が中村にキリスト教で葬式をしましょうか、と尋ねたところ、中村は微笑しながら、「葬式だけは神道でやって貰いましょう」<sup>68</sup>と言ったという。

そしてその遺言どおり、神道式の葬式が挙行されたそうである。

## 注記

### 第1章

- (1) 海後宗臣『日本近代学校史近代日本学校教育論講座1』(2001) クレス出版 P19
- (2) 井上久雄編『明治維新教育史』(1984) 吉川弘文館
- (3) 沖田行司『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』(1992) 日本図書センター P72
- (4) 沖田は、この説は学校を神の道(本教)を注ぎこむことを通して、人々の「心情的結合」をより組織的に効果的に成し遂げる機能であったという。同上 P58
- (5) 同上 P72
- (6) 同上 P76
- (7) 藤田昌士『学校教育と愛国心』(2008) 学習の友社 P21
- (8) 藤田昌士『東京大学教育学部紀要第八巻』p196 横井は坂本龍馬の思想にも影響を与えている。
- (9) 沖田行司 前掲書 P43
- (10) 海後宗臣 前掲書 P62
- (11) 佐沢太郎訳 河津裕之校閲 文部省『仏国学制』(1894) などである。  
「学制取調掛」(主席) 箕作麟祥(仏)、内

田正雄(蘭)、河津裕之(仏)、辻新次、瓜生幾寅(英)、岩佐純、長谷川泰(独)、西周、木村正辞、杉山孝敏、小田尚種など  
海後宗臣 前掲書 P65

- (12) 海後宗臣編纂『日本教科書体系 近代編第一巻 修身(一)』(1961) 講談社 P12
  - (13) 『近代教科書の成立』(P236)
  - (14) 全国教育者大集会編『帝国六大教育家』(1907 博文館)には、大木喬任(文部大臣)、森有礼(明六社・文部大臣)、福澤諭吉(慶応義塾)、新島譲(同志社)、近藤真琴(攻玉社)、中村正直(明六社、同人社)などに、明六社の人物の3人が挙げられているが、尚6人のうち、キリスト教関係は、新島譲と中村正直、女子教育は森有礼と中村正直、幼児教育では近藤真琴、中村正直である。
  - (15) 山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』上・中・下 全3巻(2009) 岩波書店
  - (16) 西村は儒学を安井息軒に師事し、経学、すなわち儒学の經典を修得。槍術、西洋砲術、西洋医学を学ぶ過程で洋学書の購入や翻訳。長じて佐倉藩主の外国事務係となって日米通商条約の交渉や佐野藩の藩政の実利的改革を指導した。『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』沖田行司(1992) 日本図書センター P82~87
  - (17) 『明六雑誌』下巻 P82
  - (18) 西村の演説「日本道徳論」(1887) 日本弘道会編『西村茂樹全集』思文閣(1967) 第1巻  
沖田行司 前掲書 所収 P99
  - (19) 藤原喜代蔵『明治・大正・昭和と教育思想学説人物史』第1巻 明治篇(1943) 東亜政経社 P424 第2章
- ### 第2章
- (20) 岡本洋之「中村正直における『異なるものの共存』の思想」(1997) 日本教育史学会紀要『日本の教育史学』第40集
  - (21) 高橋昌郎『中村敬字』(1966) 吉川弘文館 P6-8
  - (22) Yone Noguchi “A true Funder of Empire” (1907年3月9日付掲載) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』(1907) 成功雑誌社
  - (23) 同上
  - (24) 井上哲次郎「日本教育学資料 教育者としての中村正直」『教育』第1巻50号(1933)

- P72
- (25) 三宅雄次郎「故文学博士中村正直君について」前掲書 全国教育者大集会編『帝国六大教育家』所収 P53
- (26) 国吉栄『関信三と近代日本の黎明』(2005) 新読書社 P136
- (27) これは「敬宇中村先生演説集」に掲載されたという。井上哲次郎 前掲論文 P76
- (28) 高橋昌郎 前掲書
- (29) 海後宗臣『日本教科書体系近代編第1巻 修身(一)』(1961) 講談社 P27  
なお、『西国立志編』の原文は上記『日本教科書体系』に前文が掲載されている。
- (30) 高橋昌郎 前掲書 P78-79
- (31) 演説「人民の性質を改造する説」『明六雑誌』第33号(1896) 岩波文庫 下巻
- (32) 同上 P69
- (33) 中村正直「西学一斑」前掲書『明六雑誌』下巻
- (34) 海後宗臣「教育勅語成立史研究」『海後宗臣著作集』第10巻(1981) 東京書籍
- (35) 同上 P298
- (36) 同上 P292~93
- (37) 同上 P296
- (38) 藤原喜代蔵 前掲書 P785
- (39) 高橋昌郎 前掲書 P161
- (40) 『明六雑誌』(第33号 1896年3月) 岩波文庫 下巻
- (41) 同上 P125~
- (42) 同上 P127
- (43) 田中不二麿「教育瑣談」『五十年史発行所開国五十年史』上巻 (1907) P727
- (44) 関信三(安藤劉太郎)は、2年半ほど英国を中心に、欧州事情を見聞し、帰国後、翻訳や編纂作業に携わっていた。この時期に『幼稚園記』を翻訳し、関信三の名前で出版する一方で、東京語学学校とこの東京女子師範学校の英語教師に着任し、その功績により、田中不二麿等の推挙によって監事に就いた。
- (45) 中村正直訳『トゥアイ氏幼稚園論ノ概旨』  
Douai, A. The Kindergarten. A manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public Schools; Mother and Private Teachers, 1871
- (46) 東京都政資料館編『東京の幼稚園』  
高橋昌郎 前掲書 P174

- (47) 藤原喜代蔵『明治・大正・昭和教育思想学説人物史』前掲書 P748
- (48) 石井民司『自助的人物典型中村正直伝』(1907) 東京成功雑誌社 P144

#### 主要参考文献

- ・藤原喜代蔵『明治・大正・昭和教育思想学説人物史』(1943) 東亜政経社
- ・『明六雑誌』(第33号 1896) 岩波文庫 上中下巻
- ・唐澤富太郎『唐澤富太郎著作集』第1巻(1994) 株式会社ぎょうせい
- ・藤田昌士『学校教育と愛国心』(2008) 学習の友社
- ・竹林貫一『漢学者伝記集成』(1928) 名著刊行会
- ・国民教育奨励会『教育五十年史』(1922) 民友社
- ・海後宗臣「教育勅語成立史研究」『海後宗臣著作集』第10巻(1981) 東京書籍
- ・勝部真長・渋川久子『道德教育の歴史』—修身科から「道德」へ—(1984) 玉川大学出版部
- ・教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』(昭和13) 教育資料調査会  
海後宗臣編纂『日本教科書体系 近代編 第一巻 修身(一)』(1961) 講談社
- ・井上久雄編『明治維新教育史』(1984) 吉川弘文館
- ・沖田行司『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』(1992) 日本図書センター
- ・国吉栄『関信三と近代日本の黎明』(2005) 新読書社
- ・高橋昌郎『中村敬宇』(1966) 吉川弘文館

[Abstract]

Conflict and Ambiguity at the Dawn of Modern Japan and Moral Education :  
Centering around Educational Theories of Seichoku Nakamura

Reiko SAKAI

At the starting point of modern Japanese Education, Japan generally introduced European and American style education for *Gakusei* (the Japanese of school system).

At the same time, the school system included the study of Confucianism and Classical Japanese literature, and Japan found a way to restore the old *Kyoikuchokugo* system.

Looking at this point, this paper examines the ideas of Shigeki Nishimura and Seichoku Nakamura, who attempted to combine European and American cross-cultural ideas with Confucianism (Shintoism) and Buddhist moral thought in the early Meiji Period.

This paper examines the two sides of modern Japanese education looking at their educational assertions and actions, especially, their moral education theory.

This paper is divided into two parts :

- 1) Introduction to European Educational thought and
- 2) Seichoku Nakamura and his educational theories.